

---

# らいと&ないと #0

深月織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らいと&ないと #0

### 【Nコード】

N8506R

### 【作者名】

深月織

### 【あらすじ】

世継ぎの姫の独白。

【魔女とお嬢様】 スピンアウトのスピニアウト。時代的には以前です。

綺麗な服も宝石も、心から欲しいものには敵わない。

たったひとつ、欲しいもの。

自分はそれを、望んではいけないのだ。

「ミーディアの水害救援はファウ子爵に任せろ。隣接している土地同士、恩を売っておいて損はないだろう」

自室から執務室に行く間も懸案を口頭で片付けていく。そばに付き従うヴィルフリートがそのひとつひとつを耳だけで覚えて後ほど書面にする、そういう形をとって長い。

病床の父に代わり、唯一の嫡子であり世継ぎの姫である私が国王代理として政務に就くようになって五年。ようやく自分の思うように政が回るようになってきた。

もちろんそれは、一を言って十理解することができるこの男が私の傍に居てこそだが。

我が国には珍しい黒髪と紫色の瞳を持つ彼は、私自身が召し上げ侍従にした男だ。

幼かった私の我が儘で、孤児でありながら姫付きの使用人になっ

たヴィルだが、成長するに従いその能力を発揮し、現在は宰相候補にまでのしあがっている。

女王になる私の腹心として、誰にも文句が言えない働きぶりだ。

幼い頃の、約束通りに。

「では子爵に伝えます。ところでアデリアーナ様、警羅隊長から奏上が」

「うん？ 何だ」

「ブランシエリウムとザーアッドの戦の影響で城下に傭兵が流れて来ています。まだ特に目立った揉め事は起きておりませんが、出来れば事前に街に兵を配備しておいた方がよいのではと」

小さく、「通常のルートでは姫のもとまで話が通らないようなので、私が直接伝言を頼まれました」と皮肉げに付け足された言葉に眉を上げた。

城下の安全を守る警羅隊は一応王国軍に属する組織である。が、上流層の者が中心となる国軍とは違い、下流の身分を問わない者が集まっていることから、あまり城内での待遇が良くないのだ。どちらも国を民を守るためにある武力だというのに、頭が悪いものが多すぎて困る。主に軍の上層に巣食う老害が原因だが。早く一掃したいものだ。

「あのハゲ將軍め、私を舐めているな。わかった、ヴィルのほうから……そうだな、リトウ近衛隊長に話しておいてくれるか。彼なら上手く手を打ってくれるだろう」

「はい。アデリアーナ様、」

回廊に差し掛かったところで、突然ヴィルが私を引き寄せた。男の腕と壁に挟まれる形で身体を囲われる。

身動いだ私の耳に、剣を抜き放つ音。それを確認すると同時に、

押し付けられていた回廊の柱と壁の隙間に素早く身を隠した。

寸前まで自分がいた場所に矢が撃ち込まれ、さらに続けて飛んでくるそれを剣でヴィルが叩き落とす。

「衛兵！ 出合えい！」

声を張り上げて私は叫んだが、まるで人気を感じない。  
おかしい。

警備ルートからそう離れてはいないはずなのに、直ぐに駆けつけるはずの衛兵が一人も居ないなんて　ヴィルが何処からともなく現れた刺客たちを相手にするのを目の端に捉えつつ、私が思い浮かべたのは先ほど話題にも上がったハゲ將軍　否、メルヴィン右軍隊長の顔だった。

城内の警備は彼が仕切っているのだ。それを考えると、謀られたと思つて間違いはないだろう。

昔から権力への執着を隠さず、私を傀儡にしようと色々画策していたが。

自慢ではないが早死に家系の我が王家で、国を継ぐことができる血を持つのは今では私しかないというのに。

殺してどうする。

やはり老害、早いとこ始末しよう。

「姫！？　おい、曲者だ！」

剣檄にようやく気付いたのか衛兵が姿を見せ、仲間を呼ぶ。

既に半数ヴィルに手傷を負わせられていた刺客たちは、不利を悟つたのか身を翻して消えていった。

「…………アデリアーナ様、もういいですよ」

気配が無くなったことでヴィルは戦闘モードを解き、剣を納めて壁の隙間から顔を覗かせた私に手を差し伸べてくる。その手を取ってヒョイと回廊に躍り出た。

「ヴィル、怪我は」

「大丈夫です」

見上げた男は一对多数の立ち回りを演じたとは思えないほどケロリとしていて、私は安堵の息を吐く。

全く、文官としても武官としても使えるやつだよ、よくぞ拾った私。

慌てて駆けつけた衛兵たちに、賊の侵入を許したことで、私に無断で警備ルートを変えたことに対する嚴重注意をしておいたが、恐らく無駄だろう。

再び歩き出しながら、ヴィルが言った。

「先ほどの者たちは多分私に対する嫌がらせですよ。姿を現してからも、姫には見向きもしなかったでしょう」

そつえば。

隠れてたとはいえ多勢に無勢、狙う隙などいくらでもあったのに、馬鹿みたいにヴィルばかりに向かっていったな。

「おそらく例の件で、逆恨みされてるんじゃないですかね。将軍が押す者をごとく却下しましたし」

ニヤリ、と意地の悪さが透けて見える笑いに呆れた視線をやった。全く。無駄に挑発したんじゃないだろうな。

「ご成婚相手の資料が揃いましたが、目を通されますか」

「必要ない。お前と父と宰相が決めた者なら、私に否やはないよ」  
執務室に着き足を止めて。衛兵が扉を開くのを待ちながら、前だ  
けを見てそう答えた。

私にとっては。

お前でないなら誰だって同じだ。

私はアデリアーナ・リエラ・オウン・ランシア。

北の小王国ランシアの唯一の世継ぎ、次期女王。

半年後には会ったこともない相手との婚儀、そして戴冠式を控えて  
いる。

生まれたときから、地位も、権力も、財も、全て与えられていた。

だから。

望んでは、いけない。

To be continued...?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8506r/>

---

らいと&ないと #0

2011年10月5日16時04分発行